

月の花挽歌 ～14. 二つの月～

14.二つの月

14- 1

二つの月と二つの恋

作詞／並木真人 作曲／清原賢治

時満ちて 女は旅立つ

信州さらしな 月の駅まで

抜け殻に 抜け殻に 潤いをくれた

男へのレクイエム

夢うつつ いずれも幻

東京盛り場 月の恋歌

道ならぬ ホステスと男

ふたりが刻んだ メモリアル メモリアル

※ ムーンライト イリュージョン 二つの月

ムーンライト ムーンライト イリュージョン 二つの恋

夢うつつ いずれも幻

ムーンライト ムーンライト イリュージョン

秋祭り 踊るは町流し

信州さらしな 月の里唄

黒髪に 黒髪に 編み笠を被り

捧げるは レクイエム

夢うつつ いずれも幻

東京盛り場 月の恋歌

道ならぬ ホステスと男

女が捧げる レクイエム

※ くりかえし

月の花挽歌 ～14. 二つの月～

14-2

二つの月と二つの恋

並木 真人 作詞

清原 賢治 作曲
編曲

Guit. Solo →

Am B7 E7

Am A7 Dm

Am E7 Am

ときみちて
あきまつり

Dm Bm7-5 E7 Am E7

おんなはたびだつ しんしゅうさらしな つきのえきまで
おどるはまちなが し しんしゅうさらしな つきのさとうた

A7 Dm Bm7-5 E7

ぬけがらに ぬけがらにー うるおいをくれた
くろかみに くろかみにー あみがさをかぶり

Am Am7/G Fmaj7 Dm B7 E7sus4 E7

おとこへの レクイ エム
ささげるは レクイ エム

Am Dm Bm7-5 E7

ゆめうつつ いずれもまぼろし とうきょうさかりば
ゆめうつつ いずれもまぼろし とうきょうさかりば

Am E7 A7 Dm

つ 一きのこいうたー みちならぬ ホステスとおとこー
つ 一きのこいうたー みちならぬ ホステスとおとこー

月の花挽歌 ～14. 二つの月～

14- 3

Bm7-5 E7 Am Am7/G FMaj7 Bm7-5 E7
 ふたりがきざんだ メモリアル メモリ ア
 おんながささげる レクイエム レクイ エ

Am E7 Am B7
 ルム ムーン ライト イリュージョンー

E7 Am A7
 ふたつの つき ムーン ライト

Dm G7 C E7
 ムーン ライト イリュージョン ふたつの こい

2回目、繰り返す(5小節、そのあとコーダへ)
 Am Dm Bm7-5
 ゆめうつつー いずれもまぼろしー ムーン ライト

E7 Am E7
 ムーン ライト イリュージョンー

Dm Am B7 E7 Am E7
 (Coda)

Dm Am *rit.* Bm7-5 E7 Am
 (Coda)

14- 4

ホテルオークラ本館6階にある広東料理の店『桃花林』で辰巳と真紀は食事と会話を楽しんでいた。

辰巳太郎はクラブ『こはる』の顧客の一人にすぎなかったが、共通の趣味のチェスで意気投合したこともあって、真紀とは気の置けない間がらだった。

丁度1年前のリーマン破綻が報じられた時分に、真紀は信州の老舗の造り酒屋の娘杜氏から出抜けに打ち明けられた経営危機について、解決策の相談に乗ってもらうキーパーソンとして、灘で『W酒蔵』を経営している辰巳太郎を真っ先に想見していた。

新幹線（あさま）の車内で、急逝した男が社長だった『W酒蔵』の窮状に胸を痛めていた矢先に、電光表示案内板でリーマン破綻を知らされた真紀は、悪い時には悪いことが重なりと痛感させられた。

『こはる』もリーマンショックの影響をそこそこに受けたこともあり、『W酒蔵』の件は気に病んでいたが、気がつけば何や彼で辰巳と会えたのは1年経ってからだった。

「電話では話せない相談事とは？」と辰巳は食後に頼んだソーテルヌの貴腐ワインを飲みながら、鷹揚に微笑むと話を先へと促した。

「こちらからお願いをしておいて申し訳ないのですが、ロビーに席を改めていただけませんか？」とロビーの喧噪に紛れた方が話しやすいと思った真紀は、手を合わせて言った。

「別館の1階にあるコーヒーショップにしよう」と真紀の意を反射的に汲んだ辰巳は言うてくれた。

コーヒーショップ『カメラア』の窓際の席に案内された真紀は、夜の日本庭園を横目に見ながら店内の程良い賑わいに紛れ込んだような安堵感を覚えていた。

「ご配慮くださりありがとうございます」と真紀は心からの礼を辰巳に言った。

「……込み入った話のようだね」と辰巳は紅茶にレモンスライスを入れて、二度三度かき回してからスプーンで取り出すと、眩しそうに目を細めて言った。

「有り体にお話させていただきます——」と真紀は辰巳の顔を直視して言うてから、目の前のコーヒーカップに視線を落として直ぐに居住まいを正すと話を続けた。

「信州の『W酒蔵』をご存知ですか？」

「……長野の。うーん、知らないなあー」

「そうですか……」と真紀は意外そうな表情で溜息まじりに言った。

辰巳は真紀の落胆ぶりを可笑しがってから言い聞かせるように言った。

「日本に清酒製造メーカーは千数百社あるんだよ」

月の花挽歌 ～14. 二つの月～

14-5

「そんなにあるのですか……。勉強不足ですみません」と真紀は肩を少しすぼめながら溜息まじりに呟いてから、相談事の一端に関する無知さを恥じ入るように視線を落とした。

「その長野の造り酒屋がどうかしたのかね」

初耳とはいえ、同業者の名前に辰巳は興味を示した。

「……一年程前に亡くなられた『W酒蔵』のオーナーが、とても良くして頂いたお客様でしたので、お線香の一本でもと信州にお訪ねしたところ、女杜氏をしていらっしゃる妹さんにお会いして、ご自宅に一晚お世話になるほどお互いシンパシーを感じたのです」と真紀は遠回しに言ってから、コーヒーカップに手を伸ばした。

「翌日、彼女の車で新幹線の駅まで送ってもらったのですが、車中で唐突に酒造会社の厳しい経営状態を打ち明けられまして、早い話が、安請け合いをしてしまったという次第です」と真紀は大まかに言ってから、カップ＆ソーサーをテーブルに戻して辰巳の反応を読みとろうとした。

「おおよその見当はつくが、私にどうしろと言いたいのかね？有り体に話すと言ったが、それにしては歯切れが悪いなあ～」と辰巳はもどかしそうに言った。

辰巳は言葉に詰まっている真紀の憂いを帯びた目を正面から見つめていた。

「一年前の話だと言うが、その長野の酒造会社は、今も持ちこたえているのかね」と辰巳は尋ねた。

「私もリーマンショックの余波に必死でしたので、杜氏の彼女とは電話でのやりとりしかできませんでしたが、何とか頑張っているようです。数日前にも、『H酒蔵』の社長さんと会うことを伝えたところです。御社のことは知っていました」

「当社を知らなかったら噴飯ものだがね」と辰巳はどちらかというと当然のこのように言って苦笑いを見せた。

バッグを膝元に置いた真紀は、意を決して書類を取り出すと、「ひと月前に帝国データバンクで調べてもらいました」とおもむろに言って、大事なものを扱うようにして辰巳に手渡した。

驚いた態度も見せずに、書類を受け取った辰巳は、慣れたしぐさで調査レポートと分析データに目を通すと、がっしりした顎に手をやりながら困り顔で言った。

「徳俵に足がかかっているね」

「俵に足がかかっていますか」と真紀は相手の言葉を反復した。

「チェックメイト寸前だね」

「リザイン寸前ですか」

辰巳は短く肯いた。

真紀は眉間を寄せた。

月の花挽歌 ～14. 二つの月～

14-6

「紅茶よりはブランデーを飲みたい気分だ」

辰巳は書類を返してよこすと冷めた紅茶を一口飲んで言った。

「妙手はあるでしょうか？」と真紀は訊きながら、辰巳の表情から手の内を読みとろうとした。

「妙手？」と辰巳は繰り返した。

真紀は小さく肯いてから、妙手と言う用語の使用感に懐かしさを覚えていた。

「ないことはないさ。その前に貴女がそこまで入れ込む訳を聞かせてくれないか」と辰巳は至極当然とばかりに言った。

「おっしゃることはごもっともです。お願いする立場で言えた義理ではありませんが、そのところは……」と顔を少し歪めた真紀は言葉を詰まらせた。

「明白！明白！その男は果報者だね。同業者として羨ましい限りだ」と辰巳は周りを気にしながら声を押し殺して囁し立てた。

「すみません」と真紀は指先をこめかみにあてて消え入るような声で言った。

「まあいいさ。貴女の頼みを断れる男がいたらお目にかかりたいもんだ。明日にでも東京支店長に長野行きを命じておくから」と辰巳は言って歯を見せて微笑んだ。

「恩に着ます」と真紀は力を込めて言った。

「11時かー。あと1時間ほどで閉店なのでロビーに行って話の続きをしたいと思うが、時間はあるかな？」と辰巳は腕時計を見ながら訊いた。

「私はもちろんです。辰巳様にはお疲れのところ申し訳ありません」と話し足りないと思っていた真紀は即答した。

オーセンティックな雰囲気の本館ロビーの中2階に移動した真紀と辰巳は、ロビー中央に活けられている様々な菊たちの発する匂いを感じないわけにはいかなかった。

トイレで化粧直しをした真紀が席に戻ってみると、ブランデーが注がれたグラップガラスが2つテーブルに置かれていた。

「オーキッドバーから無理を言って運んでもらった。ナイトキャップのようなもんだ」と辰巳は嬉しそうに笑った。

「菊の匂いをつまみに乾杯！」と辰巳はグラスを掲げた。

「あんなに沢山活けてあっても、程よい匂いですね」と真紀はオークラ・ランタン越しに階下の生け花を目視する。

「桜の季節に来館してほしいね。それは見ものだから！」と辰巳は目を細めて言いながらグラスを傾けた

「ダブル、いやトリプルですね」と真紀はグラップガラスの中身を確認して咎め口調で言ったが、目は笑っていた。

ある種の異空間に、時折エレベーターの開閉する音が聞こえた。

14-7

時間は午前に差し掛かって、月曜日を迎えていた。

「今日はスケジュールがタイトなんだ。支店長に長野に行ってもらうには、今のうちにもう少し情報を集めておきたいからね」と辰巳は言って、メモ書き用に2階ロビーのコーナーサイドボードに常備してあるホテルのレターヘッド付き書簡用紙を手もとに置いて、内ポケットからモンブランのボールペンを取り出した。

「早い話、妙手と言うよりは最後の手段になってしまうが、M&Aを行う。つまり合併か買収の二者択一のどちらかしかないと思うんだ。但し、そうすることが我が社にとっても成長戦略の一環として成立するかを見極めなければならないんだ。それは分かるかな？」

「それが支店長さんを行かせる理由ですね」

「さすが、銀座一流クラブのオーナーママは話が早い。その指し手でいいのかな？」

「荒手の手段としてM&Aについては、私も考えたことはあります。甘えついでお聞きしますが、そこをなんとかソフトランディングさせる道はないのでしょうか」と真紀は辰巳の言ったことを素早く頭の中で整理してから訊いた。

「荒手の手段とは名訳だね」と辰巳は苦笑してから、続けて「しかしソフトランディングさせるとなると、A I に excellent move を託すしかないかもしれないね」と冗談交じりに言った。

そこにバーテンダーが一言添えてグラスを下げに来たので、「手を煩わせてすまなかったね」と辰巳は礼を述べて、さり気なくチップを渡した。

バーテンダーが行ってしまうと、「バーはクローズしたようだが、このままお開きにはできないね」と辰巳は腕時計を見ながら欠伸を噛み殺して言った。

「よろしいのでしょうか？」と真紀は切り上げられないでいる自身をもどかしく思いつつも、厚意に甘える言い回しをした。

「現状だといつ銀行管理下に置かれてもおかしくないんだからね。そうなつたら、津波のように地域の噂に飲み込まれてしまうんだ。荒療治だろうが、それだけは避けないといけない。貴女は女杜氏との約束を果たしたいから、私に連絡してきたんじゃないのかね。善は急げだ、こうなったからには私も後戻りできやしない」と辰巳はボールペンをカチカチ鳴らして言った。

「ありがとうございます」

「貴女の頼みとあっては、ひと肌脱ぐしかないじゃないか！」

「そう言えば、女杜氏の麻里子さんがくれた手紙のことで、気になっていたことがあります」と真紀はふと大事な探し物を見つけたように言った。

14-8

辰巳は沈黙し、真紀の婀娜っぽい口元を無遠慮に見つめて、次の言葉を待っていた。

「『W酒蔵』のある千曲市には【あんずの里】と呼ばれている観光名所があって、開花時期の3月下旬から4月上旬には10万人もの花見客が訪れるそうです。あんずの実の生産量は全国トップクラスで、その話は今年の7月に収穫された果実を麻里子さんが送ってくれたことで初めて知ったわけです。これから本題に入りますが、あんずの実と一緒に送られてきた4合瓶の中身についての説明書きが気になっていたのです。内容を要約しますと、あんずの種子の中にある杏仁と氷砂糖を米焼酎に1年ほど漬けただけの混成酒だそうです。琥珀色の中身を試飲してみると、甘くほろ苦いアーモンドのような風味が良くて独特の美味しさがあったので、商品化したら面白いのではないかと……、7月の終わりの出来事を、今しがた舌の記憶が蘇って思い起こさせてくれた次第です」と真紀はいかにもありそうなことのように言った。

「ひょつとして、それはイタリア産のリキュールでアマレットに似た酒かもしれない」

辰巳は興味深げに、用紙にボールペンを走らせた。

「米焼酎は自家製だろうね？」

「ええ、亡くなられたオーナーが心血を注いで商品開発したと聞いています」

「あんずの里と米焼酎の組み合わせかー、それは面白い。今貴女が口にしたことが、会社再生の切り札になるかもしれないよ」

「もしそうなったら……、とてもありがたいことです。だって追い詰められて、絞り出した一滴のお酒の涙ですもの」と真紀は目の奥に朧気な光を浮かべて言った。

「ワインの涙は聞いたことはあるが、上手いことを言うねー。話は戻るが、アマレットはご存知かな？」と辰巳は尋ねた。

「知っています。言われてみて、あっ、あれねって、味覚の糸が繋がってくれました」

「今飲んでいたコニャックにアマレットを混ぜるとフレンチコネクションというカクテルになるんだ。実に不思議な連鎖だと思わないかね」と辰巳は同名の映画の中で刑事役を演じた男優ジーン・ハックマンの尋問口調を我にもなく真似ていた。

「そうですか。何でもご存じなのですね」と真紀は辰巳のちらつく浮かれた表情に本気度を探りながら皮肉まじりに言った。

「長野へは、私が行きたくなかったよ」と辰巳は真紀の疑念を晴らすでもするかのように、いきなり真顔で明言した。

月の花挽歌 ～14. 二つの月～

14-9

銀座5丁目にある自社ビル『H酒造』の東京支社を9月21日（月曜・敬老の日）午前10時に出発したトヨタプリウス1800ccは、4連休で混み合う上信越自動車道の横川サービスエリアにホワイトパールクリスタルシャインのボディーカラーの車体を、なんとか駐車させた。

本社と工場の他に2つの支社と8つの支店からなる『H酒造』の営業部門は、シフト制勤務となっていた。

素早く運転席から降りて後部座席のドアを開けようとする営業課長のJを押しとどめる仕草を見せた辰巳は下車すると、曇り空の東京と違い晴れ間をのぞかせる群馬の空に向かって背伸びをした。

多少の渋滞に遭ったが、今のところ予定より1時間遅れで済んでいた。

あと2日で秋分の日を迎えるというのに、気温は28度と高かった。

お店は連休だから、私の車で案内させてくださいと言う真紀の申し出を固辞した辰巳ではあったが、直に信州へ入る手前で用を足ししながら、脳裏に彼女と二人の道中を夢想している自分に苦笑を禁じ得なかった。

それにしても、と辰巳は反芻する。車中でのJ課長との対話は、昨日の真紀との手合わせの会話を棋譜になぞらえて脳内の盤上に並べて読み返していたので、おざなりで上の空になっていた。

勝敗の如何にかかわらず、真紀の駒さばきの良さに加え、直観力の精度の差がもたらした結果が、県境のサービスエリアにいる辰巳の現況に即している。

やっとの思いで荻野屋の峠の釜めしとお茶を買ってきたJ課長は、車で食べるのがベストだと済まなさそうに言って勧めた。

辰巳が同志社大学の学生だった時分に、軽井沢の別荘へ行くのには、特急『あさま』をよく利用していた。

軽井沢駅のひとつ手前の横川駅で人気の手売りの名物弁当『荻野屋の峠の釜めし』を買うことが楽しみの行事だった。

記憶を辿っていくと、釜めしの中身や容器の益子焼の土釜もほとんど変わりにくく伝統を引き継いでいるのが感じられて、それが辰巳には嬉しかった。

社長が完食したことにひどく喜びを表したJ課長は、足取りも軽やかに容器を返しに行った。

杏仁と米焼酎。イタリア産リキュール『アマレット』に酷似した一品が妙手となったようだが、最早勝敗などは辰巳にとって、どうでもよかった。

14-10

深夜のホテルオークラでの別れ際に、お互い稀有な事例だったけれど必要に迫られて、真紀と辰巳は携帯番号を交換していた。

車が横川 S A を出て佐久平に差し掛かったところで、真紀から電話があった。

ひと通りの会話が済むと、辰巳はカーナビに表示された到着予定時刻を J 課長に確認してから真紀に伝えた。

「道路の混み具合から言って、予定時刻を上回ると思うがね。……いや、私が行きたいから決めたことだからー……わかったわかった。……白のトヨタプリウス。……社名など入れていない。……目立たない方がいいに決まっているさ。……出迎えなんかいらないから。……何かあったら、こちらから連絡する」

電話を切った辰巳は、バックミラーの J 課長と顔を合わせて微妙な笑みを浮かべた。

更埴 J C T で降りて数分後に千曲川に架かる千曲橋を渡り、県道 77 号線をしばらく走ると山の手へ上って行った。

緩やかなカーブのあちらこちらにリンゴ畑があり、手の届きそうなところに深紅色の実を付けていた。

「信州に来たなと感じるね。見事な赤色を見せているが、何という品種だろう」と辰巳は窓外の景色に目を細めてひとりごちた。

すれ違いができる場所に車を止めた J 課長は、2 カ月前に機種変更したばかりの iPhone 3GS を操作して、「秋映（あきばえ）と言って長野県のオリジナル品種だそうです」とインターネット検索した内容を報告した。

「ちょっと良いかね」と部下を促した辰巳はアイフォンを手渡してもらった。「ソフトバンクの孫さんが（鳥肌が立つほど感動した）とか（人生観を変えたほうがいい）とか言っていた鳴り物入りの新製品だね」とさりと情報通を口にした。

支店長の都合で重責を担う羽目になった J 課長は、プレッシャーを無事乗り切るために、思いを巡らせていたが、数時間にわたり二人きりで過ごしているうちに、辰巳社長の人間力に自然と引き寄せられていた。

数寄屋造りの売店用に設けられた駐車場に白のプリウスが止まると、連休でそこそこ賑わっている観光客を避けながら白衣の女が急ぎ足で近づいてきた。

車から降りた二人の男に向かって、40 代の面長ですっきりした顔立ちの女は、不安の色を見せながら尋ねた。

「不躰ながら私、W 酒造の杜氏をしております堀内麻里子と申します。失礼かとは存じますが、H 酒造のお方でいらっしゃいますか」

「……はい。しかし、素早いご対応ですね」

J 課長は辰巳と顔を見合わせて言った。

月の花挽歌 ～14. 二つの月～

14-11

「無作法なお出迎えをしてしまい、申し訳ございませんでした。ご到着時間を想定して、今か今かと監視カメラを覗き見していましたので……、車種と品川ナンバーで、思わず飛び出してきてしまいました」と麻里子は安堵したように言って、おちょぼ口から綺麗な歯並びを見せて自分を自分で笑った。

「なるほどー、そうでしたか。はじめまして私は東京支社営業部のＪと申します。こちらは社長の辰巳です」とＪ課長は辰巳の表情を窺いながら言って、名刺を差し出した。

「お忙しい中をこのような所までわざわざお越しくださいますて、何と申してよいのか、恐縮しております。ご案内いたしますので、あちらでひと休みなさってください」と真紀は名刺を受け取りながら言った。

軽く会釈で応えた辰巳は、時間を超えて紛れもなく女杜氏に一目惚れしていた。

応接室に通された時には、すでに午後２時を回っていた。

「酸味がいい塩梅で美味しいですね。この食感は秋映ですか？」とＪ課長はリンゴをシャキシヤキと噛みしめながら、さっき仕入れたばかりの情報を臆面もなく口にして尋ねた。

「よくご存じですね」と麻里子は眼で微笑して言った。

「秋の暑さに秋映とは、もってこいの味覚ですね。社長もいかがですか」とＪ課長は辰巳に持ち掛けてから、二切れ目を手にした。

眼で微笑する女杜氏の仕草が、催眠術師の指鳴らしの作用を辰巳にもたせた。

辰巳は同志社大学のラグビーグラウンドにいて、ラグビー部女子マネージャーの里見美音子と談笑していた。

辰巳が３回生になった時、マネージャーとして入部してきた新入生の美音子に一目で恋に落ち惹かれていったけれど、灼熱の恋の物語は恋煩いという名の病魔に侵されて半年で終焉してしまった。

笑顔を大切にしていた美音子は黙ったまま眼で微笑と退部していった。

面影を重ねた中で、特に女杜氏の柳眉が、辰巳の過ぎ去った３０年余りの時間を巻き戻したのだ。

努めて平静を装っていた辰巳は部下に頷き返すと、動揺を押し隠すように湯飲み茶碗の蓋を元に戻してから、フォークで一切れのリンゴを刺した。

甘酸っぱいリンゴを食べながら、内心恐る恐る女杜氏を間近で見た辰巳は、今初めて彼女が白衣の上下姿だったことに気づいた。

胸元に会社のロゴが刺繍してあった。

月の花挽歌 ～14. 二つの月～

14-12

来訪の目的を真紀から聞かされていた麻里子は、亡くなった兄と年恰好は同じ位に見える名うての酒造メーカーの社長を目の前にして緊張を隠せないでいたが、ありのままを押し通す覚悟はできていた。

麻里子は部下に勧められてリンゴを食べているがっしりした体型の中年紳士から、細身で神経質だった兄とは対照的に大企業のトップならではのカリスマ性を感じていた。

名前も知らない同業他社に、決まっていた予定を後回しにしてまで往訪する意義へのわだかまりを引きずっていた辰巳は、麻里子と出会ったことで霧消させていた。

W酒造は、連休で多少の活況を呈していたが、それでもどこかで経営破綻しそうな前兆や予兆は隠しきれないはずなのに、女杜氏の所為か、そういった痕跡は微塵もなかった。

この1年の間、いつ不渡りを起こしてもおかしくない時限爆弾を麻里子は抱えながら過ごしてきた。

そのプレッシャーに手を尽くして耐えてこられたのも、真紀の機転で雲の上の人が下りてきて、暗雲を吹き飛ばしてくれることを信じて疑わなかったからだ。

こうして、実際にH酒造の社長と同じ時間を共有していると、真紀から聞いていた解決案が現実味を帯びてくるのを、麻里子の皮膚感覚はとらえていた。

辰巳がタイトなスケジュールを押して来ているのを真紀から知らされていたので、この場は自分がイニシアチブを取った方が賢明かどうかを麻里子が逡巡していると、「申し訳ないが、すぐに済むので席を外してくれませんか」と辰巳が唐突に言うので、「わかりました。売店におりますので、お声掛けください」と麻里子はすかさず応答して、応接室を退出した。

数分後にJ課長が売店に顔を出した。

「私はこれで東京へ戻ります。社長はゆっくりなさるそうですので、あとはよろしく願いいたします」とJ課長は慌しさを自然の成り行きのような口ぶりで言った。

駐車場で労いの言葉を伝えてJ課長を見送った麻里子は、余計な詮索などしても意味がないと心に決めて、応接室に向かった。

「ホテルの予約をしたいのだが、良い所があったら紹介してもらえませんか。連休で難しいかな？」と辰巳は努めて穏やかな口調で尋ねた。

「ここから車で10分ほど行った所に無理が利くホテルがありますので、予約を入れておきます」と麻里子は何の疑いもなく眼で微笑して言った。

その時どうしてか、麻里子の眼の底にある網膜の上に大きい月と小さい月が二つ浮かんでいた。